

「感謝を優先させる」

ルカ 17:11 ~ 19

私達は日常の中で、無意識のうちにたくさんのものから、優先順位をつけて選んでいます。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」(Iテサロニケ 5:16~18) 優先順位を見直し、優先順位が一番に感謝を持ってきなさいと語られました。

■ なぜ感謝するのか

感謝はクリスチャンにとって、神様が与えた素晴らしい有効な武器です。この武器を有効に使うなら、あらゆる場面において私たちは自分の弱さに負けることはありません。感謝しやすい場面において感謝することは誰でもできます。苦手な人、心が臥せてしまう、不満や不平しか持てない相手、そんな場面や相手において感謝を優先することは簡単なことではありません。

■ Thank と Think 語源が同じ

感謝は感情の産物のように思います。しかし、語源は Think と同じ。考えて選び取って握りしめるもの、感謝は意思を働かせて選び取るものなのです。感謝の反対は当たり前です。私達は裸で母の胎から生まれました。今持っているものをあげてみてください。すでにたくさん持っている、物だけではない、家族に恵まれ、友人に、職場に、神様は多くの財産を与えてくださっています。

■ ツアラウトに冒された 10 人の話

ツアラウトとは、かつてはらい病と言われ差別された病気。レビ期には「自分の衣服を引き裂き、その髪の毛を乱し、その口ひげをおおって、『汚れている、汚れている。』と叫ばなければならない。その患部が彼にある間中、彼は汚れている。彼は汚れているので、ひとりで住み、その住まいは宿営の外でなければならない。」(13:45-46) と記されています。誰からも差別されて隔離されている彼らにとってイエス様が、さすがの彼らに答えられたのは「行きなさい。そして祭司に見せなさい。」でした。当時、ツアラウトを診断するのは祭司でしたので、祭司の判断で元の生活に戻ることができたのです。いやされた 10 人のうち 9 人は、喜んで元の生活に戻ってしまったのですが、「そのうちのひとり、自分のいやされたことがわかると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。」のです。「彼はサマリヤ人であった。」と記されています。イエス様はその姿を喜ばれ、「十人いやされたのではないか。九人はどこにいるのか。神をあがめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもないのか。」 恵みを受け取りながら、感謝をささげることができるのは 1 割しかいなかったのです。

■ ① 御言葉を受けた時、御業は始まっている

ツアラウトは癒される、イエス様の御言葉を受けて、信じて出かけ、10 人は行く途中でいやされたのです。「雨や雪が天から降っても元に戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、目を出させ、種蒔く者には種を与え、

食べる者にはパンを与える。そのようにわたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、私のところに帰っては来ない。必ずわたしの望むことを成し遂げ、私の言い送ったことを成功させる。」(イザヤ 55:10,11) 御言葉が語られたなら、御業は始まっているのです。

■ ② 感謝をささげることが優先する 感謝そのものが、神への最上の捧げもの

教会に来る道すがら、感謝が満ち溢れているか、心を点検してみてください。恵みを受けるために教会に来るのは素晴らしいこと、そして、恵まれたなら、恵みを運んで来る者に、その証を運ぶ者になりたいです。礼拝は神様との契約を結ぶということ。感謝をささげて礼拝するとき祝福のパイプはしっかり繋がれます。契約したのですから、真実と正義を尽くして問題に臨んでくださるのは神様なのです。

■ ③ 主は感謝の礼拝者を祝福される

“忠実”とは失敗した時に戻ることです。失敗するな、などと聖書は言っていない、失敗した時に戻ることを聖書は伝えています。これに忠実であれと言っているのです。忠実とはいかなる時も目を離さずイエス様と一緒にいることなのです。主が共にいることこそが忠実です。どうか神様を小さく押し込めないで下さい。例え環境を変えても何も変わりません、変えるべきは私達の行動です。それをする為に、一歩静まらなければなりません。ヨセフは環境を変えようとしませんでした。その中で行動を変えたのです。牢屋にいる時、ポテファロのところにいる時、兄達に再会した時、全ての権限をもっても羞恥をしませんでした。

■ シャロネットの話

ナポレオンの時代に、シャロネットという男が無実の罪で牢獄に入れられました。何カ月もそこで過ごした彼は自暴自棄になり、死を覚悟しました。その独房には毎日、わずかな日の光が差し込むスポットがありました。ある朝、驚いたことに固い土の中から小さな草が芽を出しているのに気が付きました。彼は、それが、神が与えてくださった希望の光のように思えたので、感謝と喜びをもって、毎日その草に水をやりました。やがてその草は大きくなり、ついに美しい紫と白の花を咲かせました。この一連の出来事を見守っていた看守たちは、この話を家に帰って妻たちに話しました。やがてこの話は、ナポレオンの妻ジョセフィーヌの耳にも届きました。彼女はこの話に心を動かされ、これほど花を愛する者が犯罪者であるはずがないと確信し、ナポレオンに裁判のやり直しを願い出しました。そしてその結果、彼は疑いが晴れて釈放され、自由の身となったのです。

(要約者:藤原友規子)

(2018年4月22日)